



2022年2月3日発行

第 117 号

事務局 〒161-0033 東京都新宿区下落合
1-3-16ジョリーメゾンヌベル下落合205号
TEL/FAX 03-6457-3921
E-mail n.s.e.g@d7.dion.ne.jp
http://www.seishineisei.gr.jp/

〈目 次〉

日本精神衛生学会第37回大会御礼

『お礼 —緊張感から解放されてホッと一息—』……………1

日本精神衛生学会第38回大会のお知らせ……………2

日本精神衛生学会第37回大会に参加して……………2

SST(Social Skills Training)の呼称の変更に関するお知らせ……………3



お礼 —緊張感から解放されて、ホッと一息—

日本精神衛生学会第 37 回大会長 水口 進(常磐大学)

もし大学が停電したら…、Zoom がブツンと切れたら…、12 月 4 日、5 日の大会が近づくにつれ、不安増大、毎日悪夢にうなされるようになった。そして口角炎になった。「辛いものの食べすぎですよ」そう言って私の口角を見て笑った下山田事務局長には、大会一週間前から瞬きチックが出現した。「あ、チックがでてる」不謹慎だが、笑いをこらえて、大会の準備をする彼女の後ろ姿に手を合わせた。学会を手伝ってくれた私の教え子たち(下山田事務局長を含む)は大会前日から水戸市内のホテルに宿泊した。私は誘われなかった。ほどよくアルコールセラピー(洗浄)をしたのか、大会当日、瞬きチックは消失していた。

4 日、私の大会長講演に続いて登壇した梶田温子さん。実は、私はとても緊張していた。うまく話せるかな…。しかしそれは杞憂だった。元気に明るく攻撃的に話す梶田さん、頼もしかった。大学1年生の頃、梶田さんと私は、フリースペースにたむろする梶田さん類似の学生たちを集めて「ガラスのハート同好会」を作ろうとした。今の彼女のハートはもはやガラスではない。鉄のハートの持ち主になっている。

今回の大会への参加申し込み者は約 230 名だった。どのプログラムにも 100 名以上の先生方が参加してくれた。本当に感謝、感謝。交流会後半の懇談会では驚きの出来事があった。各部屋を回って歩いた私の目に懐かしい顔が飛び込んできた。秋田時代、一緒に仕事をしていた小児科医の G 先生だった。16 年ぶりの再会だった。16 年前、G 先生たちは茨城に行く私のために送別会を開いてくれた。そのとき頂戴した物が 2 ギガの SD カードだった。今の若い人は笑うかもしれないが、当時、2 ギガの SD カードは高価だった。G 先生の他にも懐かしい人に出会った。全国レベルの学会参加の良いところは懐かしい人に再会し、回想にふけることができるところにある。Zoom 大会でも十分に回想にふけることができる、(私にとっては)それを証明できた学会でもあった。回想にふける時間は豊かな虚の世界に浸る時間でもあった。皆様、ありがとうございました。

日本精神衛生学会第 38 回大会のお知らせ

大会開催概要

名称	日本精神衛生学会第 38 回大会
テーマ	社会的孤立と心の健康
会期	現地 2022 年 10 月 29 日(土)～30 日(日) オンデマンド配信 2022 年 11 月 7 日(月)～11 月 30 日(火)
会場	神戸市看護大学 〒651-2103 神戸市西区学園西町 3 丁目 4 番地
大会長	船越 明子(神戸市看護大学看護学部 教授)
副大会長	北村 登(神戸市精神保健福祉センター 所長)
実行委員長	目良 宣子(山陽学園大学看護学部 教授)
後援	兵庫県、神戸市

第 38 回大会ホームページ: <https://seishin38th.jp/>

日本精神衛生学会第 37 回大会に参加して

齋藤友子・西祐紀(常磐大学大学院修士課程2年)

2021 年 12 月 4 日(土)・5 日(日)の両日、日本精神衛生学会第 37 回大会が開催されました。大会長は常磐大学の水口進先生、大会テーマは「豊かな虚の世界を求めて」であり、今年度も昨年度に引き続き Web 開催になりました。

大会プログラムはいずれも興味深いテーマで、様々な立場でご活躍なさっている先生方の講演やシンポジウムでのお話は、コロナ禍における問題を多角的に捉え、考える機会をいただいたと感じております。

1 日目は大会長講演の「豊かな虚の世界を求めて」から始まりました。コロナ禍で外に出れず、人にも会えず、これまでとは違う生活を求められる中で孤立するのではなく、孤独を楽しむ力がこころの健康を支えるのだと気づかされました。シンポジウム①「社会的養護における非虐待ケースのアフターケアの在り方ー地域につなぐということ、子どもの健やかな育ちを支える居場所づくりー」は、個人的に子どもと居場所づくりに関心があったので3名の先生方それぞれの立場からのお話を聞くことができて大変勉強になりました。他にも、支援者を目指すにあたって当事者の率直な声を聞くことがいかに大事か改めて実感しましたし、昨今の災害時における現場の取り組みについて知ることができました。

オンライン交流会では第一部は弘前石川流やまぶき会による津軽民謡の観劇が行われ、子どもたちの踊りを見ながら心和むひと時となりました。第二部のフリートークは、少人数で先生方とお話できる貴重な機会となりました。支援者として働くにあたって不安を感じておりましたが、先生方のご経験をお聞かせいただいて働くのが楽しみになりました。また、1日目を終えた時点での先生方それぞれのご感想から新しい発見があり、時間が足りないと思うくらいの楽しい交流会となりました。

2 日目も充実した内容でここに書ききれないのですが、特に印象に残ったのはシンポジウム⑤「津久井やまゆり園事件を考える-宇宙・自然・生命・人間一分化・多様・適応性と継承・相補・存在性を踏まえ-」では、チャット欄のコメントから議論が次第に深まっていくのを zoom を通して参加者が体感していったように思います。より広い視点を持つことが、偏った考えを修正し、命を大切にすることにつながると感じました。他にも、声伸ばしをパソコンの画面越しに体験したり、障がい児のダンスを動画で見たり、オンライン上で様々なことを共有しながら先生方の話を聞くことができました。

私たちはポスター発表で修士論文研究の内容について発表させていただきました。あたたかい励ましのコメントを頂き、今後一層精進していきたいと強く思いました。掲載期間の間、ホームページで閲覧できたので他の方の発表についてもじっくりと研究内容について拝読することができました。

開催にあたり、事務局スタッフの皆様のご尽力に心から感謝申し上げます。実行委員長をはじめとし、修了生の先輩方からも多大なご協力を得て今回の大会の成功に至ったことに重ねて感謝申し上げます。私たちも参加者のひとりとしてたくさんの学びを得ながら有意義な2日間を過ごすことができました。ありがとうございました。

SST(Social Skills Training)の呼称の変更に関するお知らせ

安保寛明(山形県立保健医療大学)、村本好孝(株式会社ここから、SST 普及協会)

私たちが多くの取り組みを行っている SST(Social Skills Training)について、SST の普及と発展に貢献している SST 普及協会では、SST(Social Skills Training)の訳語を「社会生活技能訓練」から「**社会生活スキルトレーニング**」と改訂しましたので報告いたします。

SST は医療分野のみならず教育、司法・矯正、市民生活の領域へと広がり、また SST の内容もコミュニケーション・スキルの改善、対人関係の構築と改善、生活上の問題解決、疾患の自己管理などへと大きく広がっています。SST は、かつての「入院生活技能訓練」だけでなく、広い領域で多様な内容をもって取り組まれるようになりました。

従来の和語である「技能訓練」には、支援者が SST に参加する当事者を訓練するという一方的で支援者が一段高い立場から当事者を支援するような響きを感じられるとの意見があります。時代は、支援者・当事者が共同創造(co-production)により生活の質を上げる、社会参加を進める、生活上の問題を解決する、コミュニケーションの力を増すことを重視するように変化しています。

そこで、SST 普及協会では、当事者の主体的な学び、当事者のパーソナル・リカバリーが求められる時代の SST(Empowered SST(e-SST))を発展させます。SST は「こうなりたい」「こういうことができるようになりたい」という当事者の希望から出発することを強調し、参加当事者の希望をもとに、当事者と治療者が共同で目標設定をして SST を実施するものと考えています。また、当事者の内発的動機づけ、SST セッションへの主体的参加や当事者が抱える問題への自己対処の意欲を尊重し課題遂行は治療者と当事者の共同を大切にしています。ほかにも、認知機能の改善や認知機能リハビリテーション(cognitive remediation)と結びつけること、SST を地域生

活支援のコア技術として位置づけ、訪問サービスや家族心理教育・家族支援などと統合した SST として実践することです。e-SST は自ら学ぶことを基本にしており、また(送信)行動だけではなく、認知(受信と処理)についても介入の対象としますが、そうした特性から従来の SST の方がより適切なスキル練習ができる対象や状況が広がっていくものと考えています。

そのような支援者と当事者の共同創造あるいは当事者の主体的な学びを表現するのに相応しい用語(和語)として「**社会生活スキルトレーニング**」が適切であると考え、SST 普及協会で決めました。

日本精神衛生学会の関係各位にも、改訂理由とともに、SST の和語の改変と定着にご協力を頂けますようお願いいたします。

